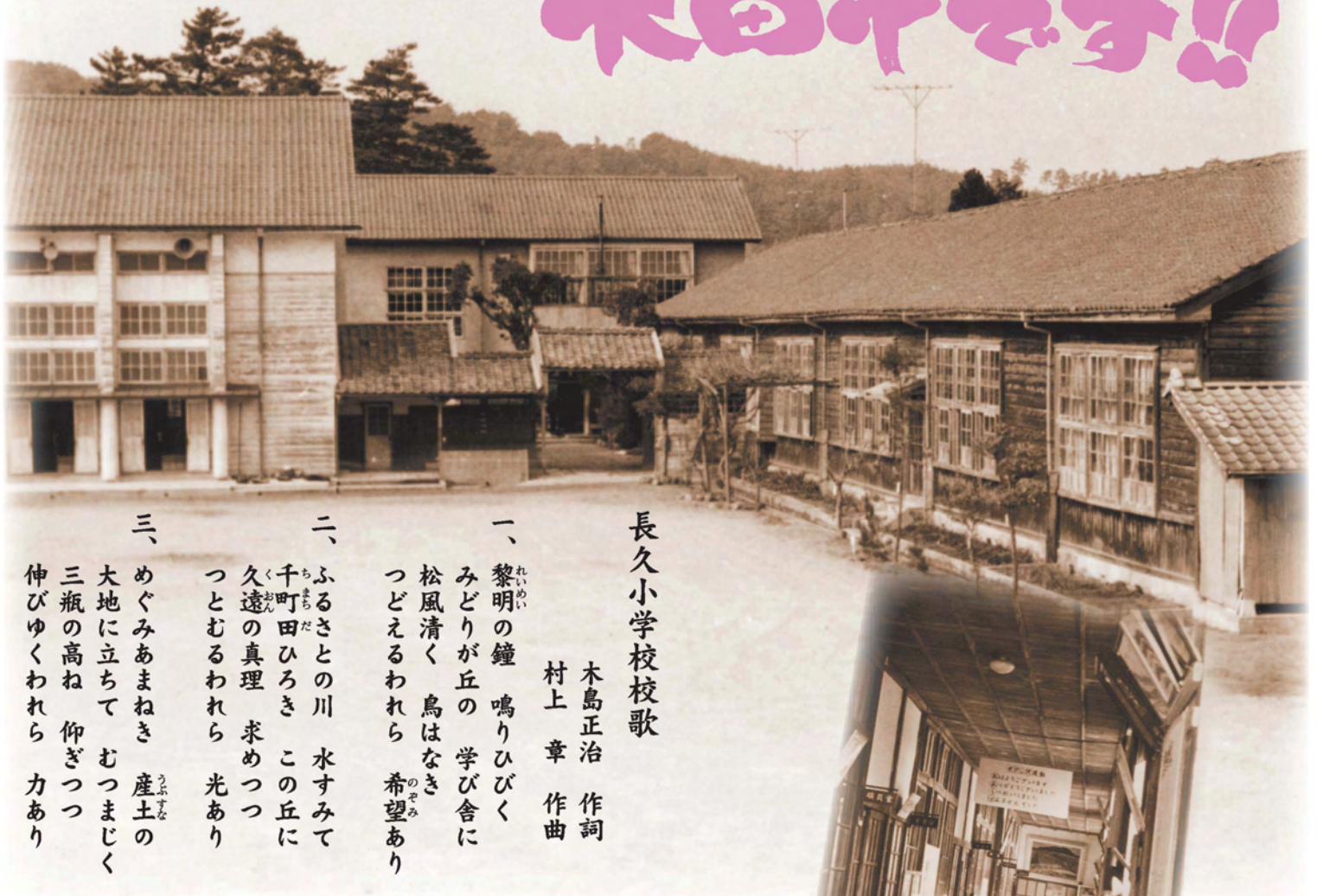


# どがなかな 木回市です!



## 長久小学校校歌

木島正治 作詞  
村上章 作曲

一、黎明の鐘 鳴りひびく

みどりが丘の 学び舎に  
松風清く 鳥はなき  
つどえるわれら 希望あり

二、ふるさとの川 水すみて

千町田ひろき この丘に  
久遠の真理 求めつつ  
つとむるわれら 光あり

三、めぐみあまねき 産土の

大地に立ちて むつまじく  
三瓶の高ね 仰ぎつつ  
伸びゆくわれら 力あり

## Contents

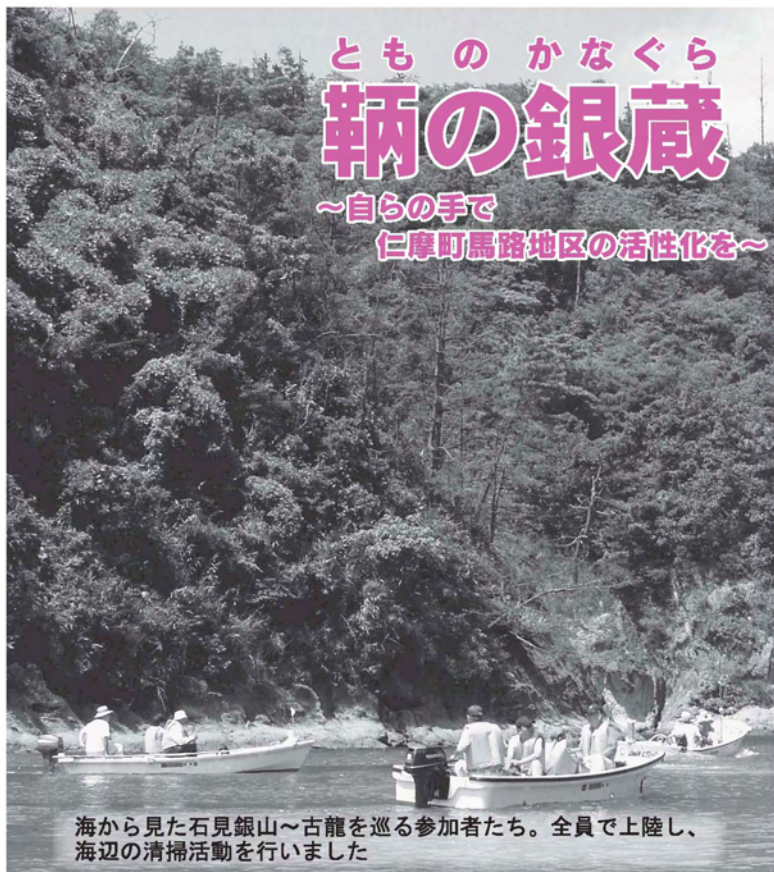
- ◆ 2P 鞆の銀蔵～自らの手で仁摩町馬路地区の活性化を～
- ◆ 3P 大田市総合計画を策定しました  
シリーズ新石見銀山⑤
- ◆ 4・5P 特集 今、温泉津が熱い!
- ◆ 6P THE KAWARA -瓦-かわら-
- ◆ 7P ふるさと探検隊  
～材木屋の若衆「木盛会」～  
ちよんぼし語録
- ◆ 8P ふるさとは今/イベント情報  
表紙説明/編集後記

2007 February 2



# とものかなくら 鞆の銀蔵

～自らの手で  
仁摩町馬路地区の活性化を～



海から見た石見銀山～古龍を巡る参加者たち。全員で上陸し、海辺の清掃活動を行いました

湯里地内)を巡るツアーを開催しました。かつて古龍は、石見銀山の積み出し港として栄えた港町と推定されていますが、現在は道も荒廃し、船での上陸しかならないため、幻の港町といわれています。

鞆ヶ浦を出港し、古龍まで往復する約40分のツアーには、募集定員の約2倍の42人が参加しました。

普段は見る機会がでないリアス式の海岸線を海上から眺め、参加者は深い感動とともに古龍の浜に上陸しました。

## 食と感動の積み出し港 「鞆の銀蔵」を目指し

現在「鞆の銀蔵」は鞆ヶ浦を訪れる人に「食と感動」を提供しようと、ふるさと島根定住財団の助成を受け、築80年の民家を解体して古い材木を再利用し、民泊施設を建設中です。今年4月の完成を目指し、急ピッチで作業が進められています。

## 関心の高かった 「海から見た石見銀山」

昨年8月に、今後の体験事業の参考とするため、伝馬船で幻の港町・古龍(温泉津町

## 「鞆の銀蔵」とは…

鞆の銀蔵は、石見銀山遺跡の世界遺産登録を契機に仁摩町馬路地区の地域資源を活用したツアーリズムを展開し、馬路地区を盛り上げようと、平成18年4月に地元有志が集まり立ち上げた地域活性化グループです。

馬路の「鞆ヶ浦」は16世紀前半から中ごろにかけて、銀鉱石を積み出すための港とし

この施設を拠点とし、地元海産物を食材とする食堂や、土産物の販売、各種体験事業、観光案内事業を行うこととしています。なかでも、各種体験事業では、伝馬船でめぐる洞窟探検、大敷(定置網)体験、鍔絵体験など馬路を五感で感じるさまざまなプログラムを考えています。

代表の山根俊隆さん(68)は、「不安はあるが、やるからには成功させなければならぬ。『鞆の銀蔵』の活動により、地元の雇用機会も増え、地域の活性化につながる」と、熱く語ります。

今後は、観光客の増加が予想されますが、その受け皿と



して「鞆の銀蔵」への周囲の期待も大きく膨んでいます。

## 中四国初! 緑と水の連絡会議が 「認定NPO法人」 に認定されました!

第3号で紹介した「NPO法人緑と水の連絡会議(高橋泰子理事長 会員数80人)が、昨年12月1日に、運営組織や事業活動が適切で公益の増進に資するなどの一定の要件を満たしたとして、国税庁長官から認定NPO法人として認められました。

は、49法人(同日現在)ほどで、中四国地方では初めての認定です。

これにより、同会議へ個人が寄附した場合は、所得税の寄附金控除の対象となり、法人の場合は一般寄附金の損金算入限度額とは別枠で一定限度額まで損金に算入されます。高橋理事長は、「寄附という形で、私たちの環境保全活動を国民の皆様を支えていただけたら嬉しい。」と活動への理解を願っています。



将来像

自然・歴史・ひとが光り輝く  
だれもが住みよい

県央の  
中核都市

新市を創造する3つの力

魅力・活力・協力

まちづくりの基本方針

- 地域資源のネットワークによる活発な産業づくり  
産学官連携等による大田ブランドづくりなど
- だれもが住みよく、安心・やすらぎを感じる生活づくり  
子育て支援の充実（保育料軽減等）など
- 県央の中核都市にふさわしい、快適な基盤づくり  
情報通信基盤の整備・活用（CATV開設等）など
- 石見銀山をはじめとする歴史文化をいかした創造的な人づくり  
石見銀山遺跡の保全・活用など
- 自然との共生や循環型社会を目指す生活環境づくり  
省エネルギー・リサイクルの推進など
- 参画と協働によるまちづくり  
行財政改革の推進、協働によるまちづくりの推進

# 大田市総合計画を 策定しました

石見銀山遺跡をシンボルに  
新たなまちづくり

大田市では、このほど総合計画が策定され、今年4月から新たなまちづくりがスタートします。

総合計画は、少子高齢化や過疎化の進展、いまだ低迷を続ける地域経済など、当市を取り巻く社会経済情勢に的確に対応し、将来の大田市をどのようなまちにしていけるのか、また、そのために必要な事業や施策など、これからのまちづくりの方向性を示すものです。

計画期間は、平成19年度から28年度までの10年間。今年

夏に世界遺産登録が見込まれる「石見銀山遺跡」を市のシンボルとして、さまざまな地域特性を活かしながら、だれもが住みよい県央の中核都市を目指します。

新大田市を創造するために必要な「魅力」「活力」「協力」の3つの力を有機的に連携させ、さらに、若者定住の促進を念頭に産業振興と子育て支援を柱とするまちづくりの基本方針に基づき、住民との協力による大田市らしい個性と活力にあふれる新しい「まちづくり」を展開していきます。

5年前、大森町に居を構えていた石見銀山附地役人が天保3年（1832）に書いた日記に出会いました。今回は、その一つを紹介します。

## 古文書にふれる

富山の薬売りを一例として

「七月二十六日 越中高田薬屋清九郎罷越／去卯年分薬代／錢五百拾七文相払／残薬入替致置候事」。現代文に直すと、「越中高田薬屋高田の薬屋である清九郎がやって来て、去年預けてもらっていた薬のうち使用した分の代金として錢517文を支払い、残った薬は入れ替えていった」となります。

幼かった頃の楽しい思い出がよみがえりました。大きな柳行李を背負った薬屋さんが年に1度、我が家に来てくれました。祖父が置き薬の箱を運び出すと、薬屋さんはこの1年の間に飲まれた薬を勘定し補充するのと同時に、残った古い薬を行李の中の新しい薬と差し替えていました。四方山話が交わされるのを聞きながら、薬屋さんが早く色とりどりの風船を取り出してくれな

いかと、わくわくしたものです。さて、富山で家庭配置薬というシステムができたのは1700年代初頭。石見地方が懸場（かけば）と呼ばれる売り薬屋が回る地域になったのはさほど遅くはなかったと思われま

す。また得意先の薬の種類や量とその支払明細、家族構成や健康状態に

シリーズ新石見銀山 ⑤

（写真：薬箱おまけの風船は紙からゴムに変わっていった）



話を前述の日記に戻しますとこの日記は、銀の産出量が減ってきていることへの対処、金銭のやり繰りや年中行事など興味のつきない話題も豊富で、折を見て読み返しています。そうしているうち、これは後世へ残すことを意識して記されたものではないかと気が付きました。最近、古文書を読むことに興味を覚える方が増えています。古文書に限らず、学習意欲や創造力をかきたてる歴史資料が、どこかに眠っていたり無意識に捨て去られたりすることがないよう心がけ、また適切に資料化されることで情報を共有できたらと思っています。

市でも熊谷家文書など調査研究を進めています。石見銀山の歴史を学び触れる機会も増えることになりま



日経トレンディ「今年のヒット予測ランキング」の20位にランクインした「温泉津温泉」。今夏、世界遺産登録が確定すれば日本初の世界遺産の中にある温泉街となります。メディアでも取り上げられる機会が増え、全国から注目が集まっています。温泉津の魅力に引きつけられた若者が今、温泉津を舞台に夢に向かってまい進中です。

## 炎に挑む若人たち

# 若陶会 (わかとうかい)

若陶会は、昨年11月、椿窯の荒尾浩之さん(30)と(尙)椿窯の荒尾則和さん(38)、荒尾常寛さん(36)の3人により結成されました。

3人は、地元で採れる「ゆのつ陶土」や福光石の釉薬などを使った、新しい「ゆのつ焼」を模索中です。

12月中旬、京都から駆けつけた陶芸仲間2人とともに湯泉津やきものの里にある「登り窯」に自分たちの手で初めての火入れを行いました。食器など



温泉津の土と釉薬で新たな「ゆのつ焼」を



登り窯の前に並ぶ作品

500点余りの作品を入れた「登り窯」に午前7時に火を入れました。約500束の薪をくべながら、16時間に及ぶ炎との格闘は降り出した冷たい雨の中、夜遅くまで続きました。

火入れから6日後に窯出し。個性溢れる作品が窯の前に並びました。

代表の浩之さんは、「登り窯で思いがけない作品ができた。成果はあった、今後の課題も見つかった」と、次回に向けて意欲を燃やしています。

## 幸せといわれる作品づくり

あらお つねひろ  
荒尾 常寛



平成11年7月、28歳のときに温泉津町へUターン

大学卒業後、大阪市の衛生器具メーカーに勤めていた常寛さんは、幼い頃からそばにあった焼物が頭から離れることがなかったと言います。いずれは帰って父、寛さん(64)を師として陶工の道に入りたいと思っていました。

現在、常寛さんは、既にこの道に入って20年になる兄の則和さんと一緒に家業である(尙)椿窯を支えています。

「父や兄がやっているようにしても、土が言うことを聞いてくれない。まだまだ発展途上」と笑う常寛さん。「使ってもらって幸せといわれるような作品づくりがしたい、そのためには心の入れようが大切」と、日々土と向き合い陶芸一筋の日が続きます。

## やきもので「おもろいまち」づくり

あらお ひろゆき  
荒尾 浩之



平成4年4月、陶工を目指し、京都府立陶工高等技術専門学校に進学。卒業後、同じく京都の市立工業試験場へ。計4年の研鑽の後、平成8年4月、温泉津にUターン

浩之さんは、京都での修行の道を選んだ矢先、父、浩一さん(69)の入院で帰郷を決意。浩一さんは「兵糧攻め(仕送りをストップ)にしたらすぐ帰ってきよったわ」と、当時を振り返り目を細めます。

今は家業を手伝う傍ら、志を同じにする仲間との活動が楽しいと言う浩之さん。今後の「若陶会」について、「自分のスキルアップという目的もあるけど、登り窯の活用を含めて、今までとは違ったゆのつ焼のPRをしていきたい。お年寄りを対象にした陶芸教室や、ふるさとに貢献できる活動もやっていきたい。あとは、おもろいまちになったらいいな、ただそれだけ」。



# 今、温泉津が熱い！



## 多夢想屋 (たむそうや)



たむら そうや  
田村 宗也

### 夢に向かって神楽面づくり

平成17年11月、新潟県燕市から江津市へ1ターン。安東三郎氏（神楽面師・江津市）に弟子入りして1年が過ぎ、このたび創作の拠点を温泉津へ

田村さん(33)は、コンピュータグラフィックの専門学校でアニメーションや造形を学び、NHKホールでの舞台担当として芸能分野の様々な経験を重ねてきました。

しかし、徐々に自分の仕事に不安を抱き、チームワークでやる仕事よりも一人でやれる仕事をしたいと、バイク便を生業とするようになりました。そして、趣味の美術館巡りで人生の転期が訪れます。

ある美術館で室町時代の能面に出会い、500年という世代を経て現在に残るその姿に感動し、後世に証を残すことができるとの伝統工芸に憧れるようになりました。

また、以前から田舎暮らしに興味があり、Uターン雑誌で山陰には出身地の新潟と似た海

と「石見神楽」があることを知り、石見神楽の歴史を知れば知るほど大衆文化が受け継がれている島根の素晴らしさにひかれていったのです。その後、一念

発起で島根にやって来て、県定住財団の支援が終了した昨年11月、今後の活動拠点を求めました。もともと海や温泉が好きなことや観光地的な場所、若い人たちが熱い場所はここしかない、温泉津を選びました。

将来の夢は、「面づくりはもちろん、観光客が楽しめる場所を作ること。趣味の古い映画を流すとか射的場みたいな場所を作って、その横で神楽面を作るなんてお洒落でしょう」と語る田村さん。「多夢想屋」と名付けた工房には神楽面と対称的な笑顔が待っています。

### サーフショップ サプライズ



ふじかわ なつき おおうち あきひろ  
藤川 奈津紀 & 大内 昭宏

### 海の見えるところに住みたい

昨年5月、広島市から温泉津町福光へ1ターン

大内さん(34)は、13年前から福光海岸へ通いはじめ、この福光が大好きになり、40歳までに

は海に近い福光へ住もうと考えていました。転機は思わぬ形でやってきま

した。広島市で7年間経営していたサーフショップが立ち退きになったのです。これをきっかけに計画を実行に移すことに。一方、藤川さん(29)は広島県東広島市の出身で田舎育ち。大内さんの移住計画に何も言わず付いて来てくれたそうです。かつての店名を引き継いだサーフショップ「サプライズ」は、昨年7月28日、JR石見福光駅前通りにオープンしました。主にボードの修理のほか、サーフィン関連商品を販売しています。お客の大半は広島島の仲間ですが、最近では地元客も訪れるようになり、順調に営業しているそうです。

「島根タイム」。広島島の仲間たちが「時間がゆっくり流れている」という意味で使う言葉です。ここを訪れた仲間のほとんどが、普段より時間の流れが遅いような錯覚に陥るとか。「自然と早寝、早起きができるんです」と話す2人は福光へ来て、ますます健康になったそうです。「福光は、思っていたより住みやすく、何の不便も感じませんよ。ずっと、ここで暮らしたい」と和やかに語る2人は今年3月に結婚の予定です。



ふるさととの誇り、石州瓦を使って家を建ててみませんか。

石見地方は、愛知県の三州地方に次いで国内第2位の生産量を誇り、年間約1億5千万枚、一般家屋約5万棟分の瓦を供給しています。

大田市ではこの半分を生産しており、生産額は約70億円。大田市の総生産額の8%近くを占めています。

## 石州瓦のおこり

石州瓦は、江戸時代のはじめに浜田藩主の吉田重治が浜田城を築く際、大阪から瓦師を招いて、瓦をこの地で製作させたのが始まりと言われています。

また、石州瓦の職人が試行錯誤の末、造り上げたこの地方独特の「釉薬瓦（焼物の上薬を施して彩色した瓦）が赤瓦。この赤瓦が葺かれた美しい町並みは、石見地方の代表的な景観となっています。

大田市には、80余りの瓦の窯跡が確認されています。水上町の「島田窯」（写真右下）は、現存する13段の登り窯跡で、当時使われていた瓦の製造機道具などがそのままの姿で残っており、かつての隆盛を今に伝える全国的にも貴重な窯跡です。

## 瓦と地震

阪神・淡路大震災の直後、

倒壊した家屋に瓦が使われていたものが多かったため、家屋倒壊の原因が瓦であるという安易な報道がなされました。

しかし、震災の家屋倒壊の本原因は家の構造そのものにあります。地震に弱い構造の家に瓦を使用していたために結果的に倒壊してしまっただけです。近年の建築基準を満たした家であれば、瓦を使用しているても倒壊の恐れはまずありません（石州瓦工業組合では耐震実験を何度も重ねています）。

## 伝統を受け継ぐ石州瓦

石州瓦は都野津層（石見沿岸部一帯に広がる良質な粘土を含んだ地層）から採れる粘土で作られますが、この粘土は火に強い特性があるため、高温で焼き締める必要があります。

そのため、石州瓦は吸水性が極めて低いという特性を

持っています。

これにより、瓦の組織の隙間に水分が入り込み、凍結によつて瓦が割れる「凍害」や瓦に付着した塩分が水に溶け、瓦の組織の内部に侵入し、結晶化して瓦を破壊していく「塩害」

などの日本独特の様々な被害に對して無類の強さを発揮します。瓦は、断熱効果も他の屋根材より優れている上、施工後の維持費がかかりません。四方を海に囲まれ、湿度が多く、冬季にはとくに

より氷点下を記録する我が国にふさわしく、省エネ、耐久性に優れ、環境にやさしい屋根材であると言えます。

石州瓦が屋根材として、何百年と時代を経た今でも変わらず使われているのは、優れた住宅建材であることの証し

【参考文献】石見瓦窯誌（大田市編）三國靖夫著 石州瓦史鶴田真秀著



石州瓦を海外に出荷するメーカーもあり、その品質から海外でも高い評価を得ています。

## 石州瓦の利用促進に向けて

大田市では、地場産材を皆さんにご利用いただき、理解を深めていただくため、今年度から石州瓦利用促進事業を始めました。石州瓦を利用した新・増改築、屋根替えを大田市内の建築業者に発注される場合に、瓦の購入費の一部を補助する制度です（一定条件あり）。この機会にふるさとへの家の屋根替えなどを、お考えになられてはいかがでしょうか。

- 株式会社シバオ  
電話 0854 (89) 0201  
[http:// www.shibao.co.jp](http://www.shibao.co.jp)
- 株式会社セラミカ  
電話 0854 (89) 0011  
<http:// www.ceramica.or.jp>
- 株式会社森崎窯業  
電話 0855 (66) 0111  
<http://www.sekisyu-morisaki.co.jp>
- 石央セラミックス協同組合  
電話 0855 (65) 2868  
<http:// www2.crosstalk.or.jp/sekio>

石州瓦性能読本（石州瓦工業組合）



# もくせいかい 木盛会

## ふるさと探検隊

木盛会は、島根県木材協会大田支部に所属する9社からなる集まり。市内の全小中学校(29校)へ、自分たちで作った木製のベンチを寄贈するなど、木材の良さを伝える活動を展開中。久手町にある材木市場で、材木屋の若衆に話をうかがいました。

～森山探検隊のレポート～



「この市場には、どんな種類の木があるんですか？マツが有名と聞きましたが？」

ほとんどが、スギ、マツ、ヒノキといった針葉樹です。クリ、ケヤキ、ナラなどの広葉樹がわずかに混じります。

マツは主に2種類。出雲平野の築地松や三瓶の定め松は「クロマツ」。建築材として使われるのは主に「アカマツ」です。

曲げ強度が高いので梁などの横向きの構造材として昔から使われています。私達は愛着と自信を込めて「地松」と呼んでいます。

この地域のマツは評価が高

く、一般住宅から有名な社寺まで、全国各地の建築現場に出荷しています。

「ということは、大田市出身の方が、故郷の木材で家を建てるということも？」

もちろんできます。現地の工務店に依頼し、私達が用意した木材で家を建てられるお客様は、結構おられます。ぜひ、使っていただきたいです。

「でも、一般的には、「木の家は、値が高い！」というイメージがありますよね？」

そうですね。でも実際は、建築費に占める木材費の割合は1割程と少ないんです。銘木と呼ばれるものでなければ、

決して高くありません。国産材を外国産に変えても、差額はわずかなんです。

「地元の材料と伝統の技の家づくりをめざす『石州素舞流』という団体があるようですね。」

私達製材業者をはじめ、工務店、設計事務所、森林組合などが一緒になり、「地場産材を活用した家づくりをしよう」という団体です。

大田市内でも、大手ハウスメーカーによる施工が多くなってきました。営業努力はもちろんです。地元業者ならではの価値を高め、PRしていきます。春・秋の彼岸市では、木工品等を備けなしで販売しています。子どもの椅子づくり体験は、いつも大人気ですね。

今夏には、三瓶で一泊しての、親子体験活動を計画中の、森林の働きや木材利用の意義を知ってもらおうと考えています。

### 最後に一言どうぞ

地球温暖化防止や水源保全の観点から、木材利用が見直されています。私達も今まで以上に考え行動していきますので、みなさんには、まず、木や木製品にふれ、その良さ

を感じて欲しいです。そして、ひと家族でも多く、地場産材を使って素敵な家づくりをしていただきたいと思います。

### ちょんぼし語録

第4号の配布にあわせて行ったアンケートの中で、これぞ大田弁！と思う方言を伺ったところ、多くの声が寄せられました。中でもたくさんの方がこの言葉を書いてくださいました。

#### しごんならず

手に負えないほどのやんちゃ子をこのように呼びます。大田市内でも地域によって「しごんぼ」「しごんらん」など微妙に言い回しが異なっています。

〔例〕「なんと、あすこのあんじよはしごんらんぞ。わしがいの犬をしばきまくってやれない」「なんとことだかいの。よーもよもだろぞ」

〔訳〕「あの家の子どもは手に負えないよ。我が家の犬をたきまくるから途方に暮れているよ」「なんとということでしょう、救いようがないねえ」

これからもどんどん紹介していきます！



写真上左:山形弘司さん(42)福波物産(温泉津町)行動力抜群、木盛会のリーダー的存在。/上中:竹下哲史さん(31)竹下木材(鳥井町)新進気鋭の若手、石州素舞流の広報部長。/上右:石橋雄介さん(27)仁摩林業(静間町)木材のストック量には自信を持つ同社を現場で引っ張る。/下左:木原大輔さん(31)木原建築工房(仁摩町)製材から社寺建築まで手がける。/下右:松井修吾さん(24)石東林業商会(久手町)先代亡き後、1丁通の姉律子さんと同社を切り盛りする若社長。



# イベント情報

## ☆梅まつり

とき 3月18日(日)10時00分～  
ところ 石見銀山公園(大森町)

## ☆彼岸市「中日つあん」

とき 3月21日(水)・22日(木)  
ところ 大田市駅前通り周辺  
市民会館駐車場

## ☆三瓶山火入れ

とき 3月17日(土)予定  
ところ 三瓶山西の原

## ☆三瓶山山開き

とき 4月22日(日)11時00分～  
ところ 三瓶山山頂[雨天時:西の原]

## ☆高野寺のつつじまつり

とき 5月5日(土・祝)  
ところ 高野寺(温泉津町井田)



# ふるさとは今

『砂時計』がTBSでドラマ化!

累計300万部を超えた芦原妃名子さん原作のコミック『砂時計』がドラマ化され、仁摩サンドミュージアムや石見銀山が登場します。「大森で撮影していた!」「波根の駅で子役に会った!」など、地元は、この話題で盛り上がりました。

主人公の水瀬杏を演じる佐藤めぐみさんから、当誌のために、コメントをいただきましたので紹介します。

「島根での撮影に入る前に実際に行ってみたくて、ロケの前日にサンドミュージアムや琴ヶ浜、出雲大社を訪れたんです。サンドミュージアムの砂時計は原作のコミックにも出てきた通りで、感動しました。私が演じる杏は、4年間を島根で過ごした設定です。今回実際にその空気に触れて、杏のイメージを体で感じる事が出来ました。ロケ先で出会った方たちもとても親切で気さくで、こういうところで杏は育ったんだなああと、杏がより身近になった気がします。

琴ヶ浜は杏にとっては母親との哀しい思い出と、初恋の人との楽しい思い出の両方がある場所です。今回のロケは山陰特有のお天気に苦労して、琴ヶ浜のシーンも雨や曇りが多かったのですが、ロケ最終日だけはきれいに晴れて、杏の思い出と同様に琴ヶ浜の二つの顔を見ることが出来ました。」

放送はTBSテレビ系で、3月から、月～金曜日13時～、全60回。出演は、佐藤めぐみ、竹財輝之助、美山加恋、小野真弓ほか(敬称略)

(写真:2006年越しイベント時の祭典(仁摩サンドミュージアム))

## 編集後記

特集『今、温泉津が熱い!』の取材で、温泉津やきもの里を訪れたときのこと、偶然居合わせた観光客の方がポツリ。「石見銀山効果もあるのかな、みんなわくわくしてる感じ」なるほどそういう目で見ると、まち全体がまるで微熱を帯びているかのようです。見ているこちらまで熱くなりました。

「わたしや、こまうた(困った)ことがある。むねに、くわんぎ(歓喜)の、あげたとき、これを、かくこと、できません」(昭和の妙好人 浅原才市(温泉津町小浜)の詩より)

私も、才市さんと同感です。次号も熱い「どがなかな」をお届けします!(H・M)

## 表紙



(写真上:現在の長久小学校)  
(写真左:「おごよい」活動で風船ゲームを楽しむ子どもたち)

長久小学校は、大正12年に現在の位置に旧校舎が竣工、平成元年に現在の新校舎と体育館が竣工となりました。現在は、137人の児童と14人の教職員が楽しく学校生活を送っています。

基礎学力の定着を図るため、毎週水曜日には「計算スイスイ」、木曜日には「漢字モクモク」の取り組みを全校挙げて行っています。また、地域の皆さんから、本の読み語り、ミシンや英語活動、焼き物、グラウンドゴルフ等の指導、スクールガードパトロールなど、多方面で協力をいただいています。

近年は、子どもたち相互の好ましい人間関係の構築を目指して、カウンセリング活動や昼休みを長くしての全校ふれあいタイム、異年齢集団活動(おごよい班活動※)等に取り組んでいます。

※「おごよい」とは、長久小学校の伝統で「お:おいでよ」「ご:ごめんね」「よ:よかったね」「い:いけないよ」という合言葉であり、その精神を持って活動しています。学校の前の国道9号には、平成8年に「おごよい橋」という歩道橋ができました。

発行 / 大田市役所総合政策部地域政策課 TEL:0854-82-1600 FAX:0854-82-6667

〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 E-mail:o-tiiki@iwamigin.jp http://www.iwamigin.jp/ohda/

この情報誌は、「ふるさと情報ネットワーク事業」に登録いただいた方にお届けします。皆さんの家族や友人、知人の方をご紹介ください。